

10年10-12月期の鉄スクラップ発生見通しと10年の輸出展望

目 次

1. 10年10-12月期の鉄スクラップ発生見通し	
(1) 経産省鋼材需要見通し-----	1
(2) 需要見通しに対する視点-----	1
(3) 10-12月の鉄スクラップ発生見通し	
1) ヘビースクラップ-----	3
2) 新断スクラップ-----	4
3) 鋼ダライ-----	5
4) 発生に関するまとめ-----	6
2. 10年(1-12月)の輸出見通し-----	7
(1) 10年の鉄スクラップ輸出量-----	7
(2) 輸出低減の理由	
1) 鉄スクラップ国内需要の回復-----	8
2) 海外マーケットの変化-----	9

「要 点」

リーマンショック以降約2年が経過した。日本をはじめ各国は懸命な経済立て直しを図ってきているが、その傷は深く、軌道に乗ったかとみられた景気は再び不透明感を増してきている。経済産業省の10年10-12月期鋼材需要見通しを用いて鉄スクラップ発生量を試算すると、依然としてもりあがらない国内発生の姿が浮かびあがる。

2010.10.7

(株)鉄リサイクリング・リサーチ

代表取締役 林 誠一

1. 10年 10-12月期の鉄スクラップ発生見通し

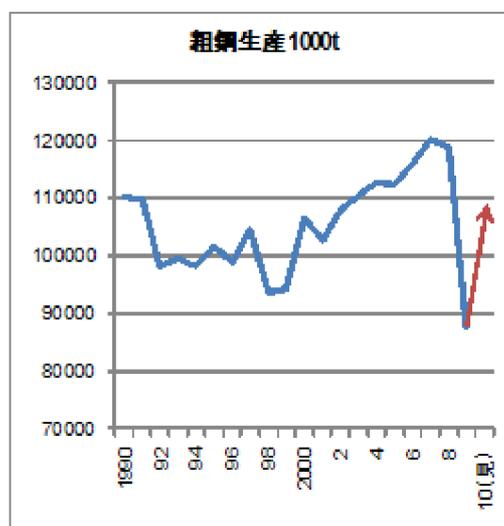
(1) 経産省・鋼材需要見通し

経済産業省が9月29日に発表した10年10-12月期の粗鋼生産量は、前期比1.5%減、前年同期比1.4%増の2,698万tと見通した。うち国内需要はエコ車購入補助金制度がなくなる自動車向けの落ち込みが影響して前期比0.9%減、輸出は円高が懸念されるものの同0.7%減と見ている。

この見通し通り進めば、10年1-12月の粗鋼生産は1億890万tとなり、09年の8,750万tに対して2,140万t(24.5%)上回ることになり、ピークだった07年1億2,020万tに対しては約10%減の水準となる。

10年10-12月の鋼材需要見通し(経産省)
単位1000t, %

	鋼材計	普通鋼	特殊鋼
鋼材需要	2,384	1,887	497
前期比	-0.9	-0.7	-1.3
前年同期比	2.0	0.4	8.9
国内需要	1,542	1,212	330
前期比	-0.9	-0.7	-1.6
前年同期比	1.9	0.8	5.9
輸出	842	675	167
前期比	-0.7	-0.7	-0.8
前年同期比	2.4	-0.4	15.4



(2) 需要見通しに対する視点

国内; 10-12月の自動車生産(四輪完成車)は222万台(前期248万台に対して10.5%減、前年同期比では10%減)とみている。国内はエコ車補助金が切れ反動減が予想されるが、世界的な需要回復に支えられて輸出が下支えととしている。予想通りならば、10年の自動車生産台数は954万台となる。09年794万台を20%上回り、08年の1,156万台に対しては17.5%減まで近づく。しかし今回の円高や米国経済の不振が世界に及ぼす影響などを考慮すると、この程度の減少で済むのか不安である。こうしたなか先ごろ発表された9月の新車販売台数は13ヵ月ぶりに前年割れとなった。

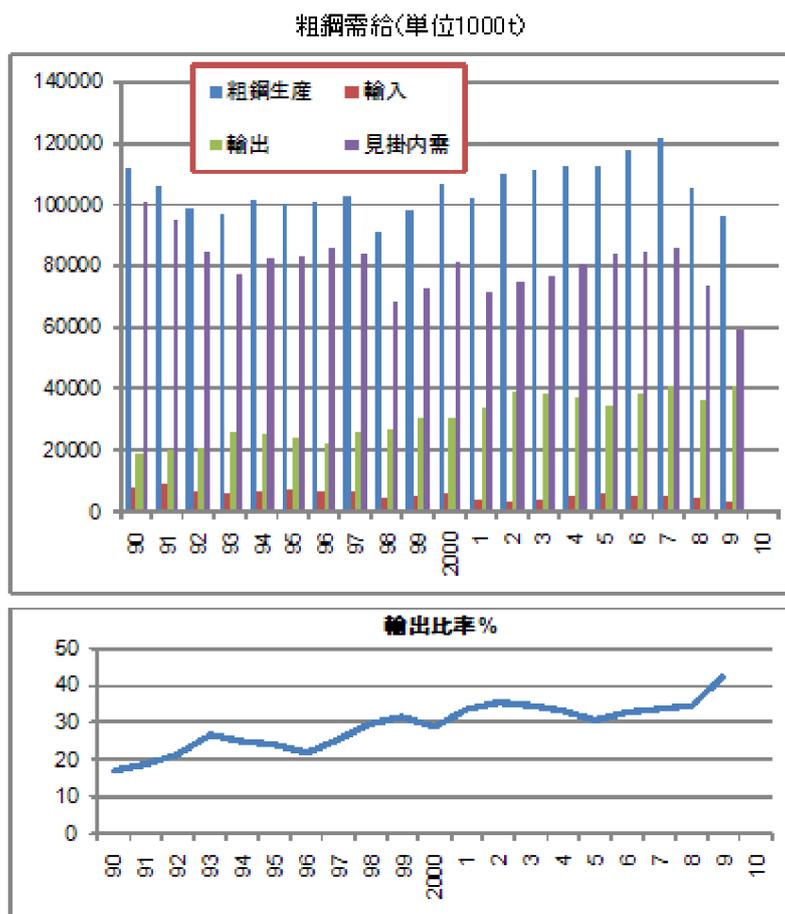
一方、建設のうち土木は低水準ながら、例年10-12月期および1-3月期は予算面から季節的に増加する。しかし建築は依然として低迷が続くとみている。10-12月の全建築着工面積は前期比0.7%減の3,094万平米であり、これに応じた鋼材消費量は324万t(前期比2.6%減)と予測し、まだまだ低水準が続く。ヘビースクラップの発生源や電炉鋼材需要源ともなるだけに、この指標の動きは目が離せない。

機械類のうち産業機械の10-12月は依然として好調が続くとみているが、円高によって間接輸出がどう変わるか不透明部分ある。

鋼材輸出；高炉メーカーの粗鋼生産を牽引してきた。見通しでは、前期比0.7%程度の減少とみているが、円高の影響がどうなるのか不透明感が強い。また米国経済不振が日本の輸出先である東南アジアに与える影響も考慮しておくべきである。

日本の鉄鋼生産は、中国や東南アジア向けの直接輸出と間接輸出が牽引して回復してきた。従来に比べて海外市場の影響を受けやすい需要構造となってきた。特に下期や来年に関しては円レートの動きが大きなポイントとなる。

下図は過去20年間の粗鋼ベースでみた需要の推移である。内需が1億トンから6,000万tに低下するなか、直接輸出は2,000万tから4,000万tに倍増し、その結果、輸出比率は90年の17.2%から2009年は42.6%に2.5倍増となっている。また内需の40%程度を間接輸出とみると、09年は2,400万tが間接輸出となり、直接輸出4,000万tに加えた外需計6,400万tは粗鋼生産9,645万tの66%を占めていることになる。



データ：日本鉄鋼連盟

(3) 10-12月の鉄スクラップ発生見通し

市中スクラップはフローから発生する加工スクラップ(=工場発生スクラップ)と、ストックから発生する老廃スクラップに大別される。加工スクラップの発生はフローの生産活動に左右されるが、老廃スクラップの代表である建築解体スクラップも日本の場合、フローの活動に左右される事情にある。つまり国土が狭いために新規に建築する場合、解体しないと行えない。解体の予測は新規建築活動の予測と裏腹の関係にあると言える。従って大雑把にみれば、市中くずの発生は全てフローの経済活動(=生産活動)と関連した関係にあると推察される。

そこで経済産業省 10年10-12月鋼材需要見通しの根拠となっている主要活動水準や部門別鋼材消費見通しを基に、過去における日本鉄源協会流通量調査による品目別流通量との関係を分析して10-12月の国内流通量を求め、次に輸出分を推定してトータル発生量とした。品目はデータ面から、ヘビースクラップ、新断、鋼ダライの3品目とした。

1) ヘビースクラップ

国内流通分；新規鋼構造建築着工面積とヘビースクラップ流通量との関係により推計した。二指標の推移により各期の原単位を算出して10-12月期に当てはめ、ヘビースクラップ流通量とした。その結果 392万tとなる。

輸出ヘビースクラップの推定；過去の経験則から全スクラップ輸出量の1/2を老廃スクラップ輸出量とする。10年の輸出は次項に述べるように620万t程度と推察されるので、約310万tとなり、うちシュレッダースクラップ輸出を40万t(月間3万t強)とみると、ヘビースクラップ輸出は年間 270万tと想定される。これをすでに通関実績のある1-8月分を差し引き、残り9-12月に按分すると、10-12月のヘビースクラップ輸出量は56万tと想定される。

トータル発生量；国内ヘビースクラップ392万tに輸出56万tを加えた計(=発生量)は448万tとなる。この水準は08年4-9月期の四半期平均比25%減であり、10年4-9月期の21.4%減よりも悪くなっている。また、業界紙調査によるギロチンシャーの年間処理能力3,560万tに対するヘビースクラップ448万tの年換算稼働率は 50.3%と算定され、厳しさ続行が予想される。

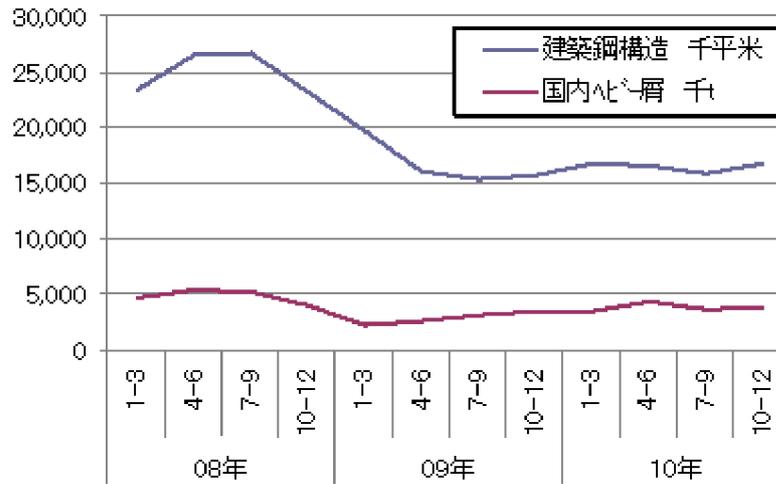
ヘビースクラップ発生見通し

単位1000、%

	08年	09年	10年		08年比		
	4-9月	4-9月	4-9月	10-12月	09.4-9	10.4-9	10.10-12
建築鋼構造	53,174	31,436	32,548	16,758	-40.9	-38.8	-37.0
国内ヘビー	10,656	5,720	8,134	3,922	-46.3	-23.7	-26.4
輸出ヘビー	1,300	2,537	1,268	561	95.2	-2.5	-13.7
発生計	11,956	8,257	9,401	4,482	-30.9	-21.4	-25.0

注:10.10-12は08.4-9の四半期平均

建築鋼構造着工面積とヘビースクラップ流通量



2) 新断発生見通し

過去の推移をみると自動車生産（四輪）台数と新断流通量とはよく相関している。この関係を用いて10-12月の経産省が推定した自動車生産計画値より、新断流通量を推計すると、国内分は112万tとなる。これに9月以降の新断輸出量を韓国向けを主体に月平均3万tと想定すると、新断発生量計は120万tと推定される。この水準は08年4-9月平均の18.8%減であり未だ低水準が続くが、ヘビースクラップよりは減少幅が浅い。

しかし、10-12月の自動車生産量はさらに減産率を高める可能性が高い。9月の新車販売台数は13ヵ月ぶりに前年水準を下回ったが、9月7日にエコ車購入補助金を終了させたことが響いているとし、10月はさらに落ち込むと予想して、生産計画を下方に修正する動きがある。新断発生は120万tよりも下回るとみるべきであろう。

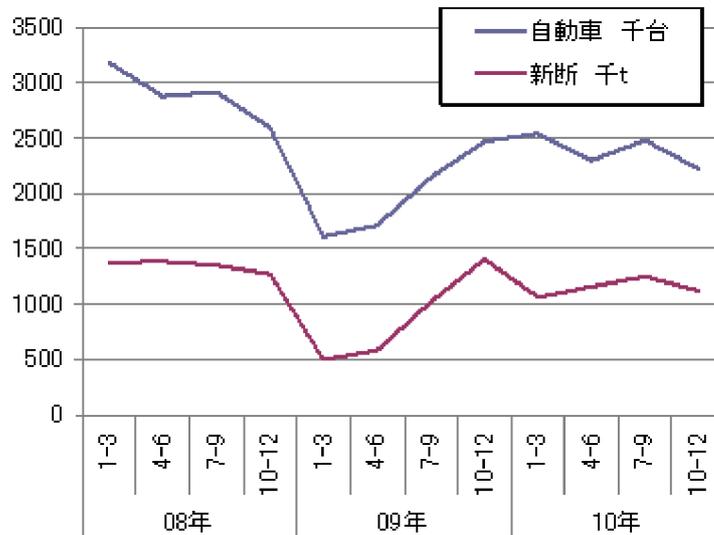
新断発生見通し

単位1000、%

	08年	09年	10年	10-12月	08年比		
	4-9月	4-9月	4-9月		09.4-9	10.4-9	10.10-12
自動車生産	5,791	3,856	4,781	2,220	-33.4	-17.4	-23.3
国内新断	2,739	1,607	2,409	1,119	-41.3	-12.1	-18.3
輸出新断	239	569	263	90	138.1	10.0	-24.7
発生計	2,978	2,176	2,672	1,209	-26.9	-10.3	-18.8

注: 10.10-12は08.4-9の四半期平均

自動車生産台数と新断流通量



データ:自動車=経産省需要見通し、新断=鉄源協会・流通量調査

3) 鋼ダライ発生見通し

切り粉とも呼ばれる鋼ダライは、機械類・ネジ等の製造過程で発生するが、適当な活動水準がないため、経産省鋼材需要見通しの根拠となっている鋼材需要部門別消費量のうち10-12月期の産業機械部門における鋼材消費量と鋼ダライ流通量との相関を使用した。なお、輸出は試験的に行われていると聞かすが、現段階ではゼロとした。

その結果、10-12月の鋼ダライは56万tと推察される。08年上期に比べて15.1%減の水準であり、09年4-9期44.7%減、10年17.3%減と回復してきている。

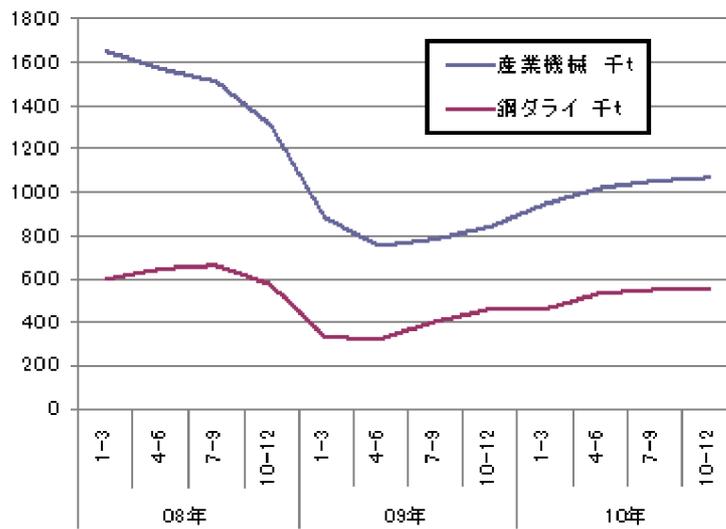
鋼ダライ発生見通し

単位1000、%

	08年	09年	10年		08年比		
	4-9月	4-9月	4-9月	10-12	09.4-9	10.4-9	10.10-12
産業機械	3,078	1,529	2,068	1,063	-50.3	-32.8	-30.9
国内鋼ダライ	1,314	727	1,086	558	-44.7	-17.3	-15.1
輸出鋼ダライ	0	0	0	0	0.0	0.0	
発生計	1,314	727	1,086	558	-44.7	-17.3	-15.1

注:10.10-12は08.4-9の四半期平均

産業機械部門鋼材消費量と鋼ダライ流通量



4) 発生に関するまとめ

本年 10-12 月の市中スクラップ発生についてまとめると、新断、鋼ダライ等の工場発生くず（加工スクラップ）は 08 年の上期平均比 15%～19%減まで回復するが、老廃スクラップの代表品種であるヘビースクラップは依然として 25%減の低水準が続く。ヘビー屑は年間を通して 50%前後の稼働率を余儀なくされそうである。

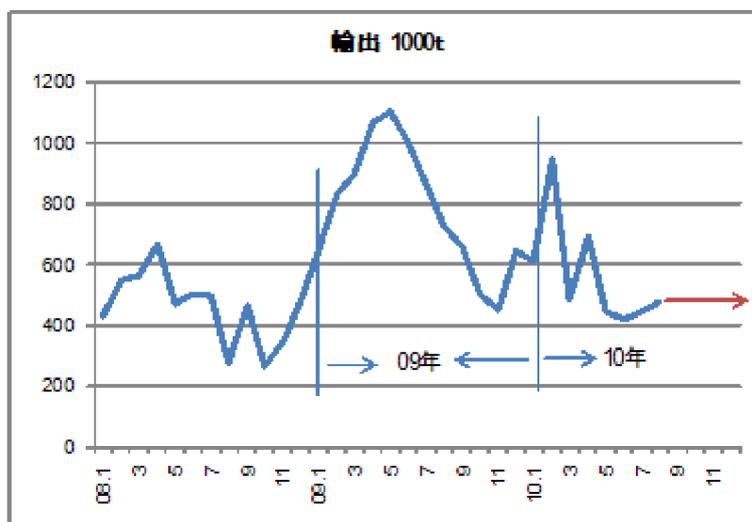
否、人口はすでに減少期にあり少子高齢化が進展している時代である。建築活動がこれから活気によみがえる環境になく、08 年上期を超えることはむしろ考えにくい。今後、中長期的にみても現状稼働率はあと 10%程度回復するに過ぎないと見て、事業運営を進めるべきではないだろうか。

2. 10年の輸出見通し

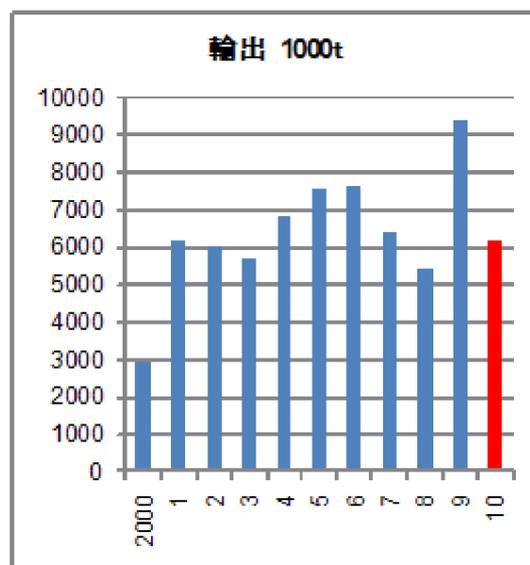
(1) 10年の鉄スクラップ輸出量

発生低迷、国内需要の回復で10年前半は輸出増加に歯止めがかかり、1-8月計は443万t、月55万tペースで推移した。09年は78万t/月平均なので約30%ほど低いレベルである。さらに9月以降は円高や韓国市場の低迷もあってこのまま減速傾向が続き、9-12月は月間45万t程度で推移するとみた。通算した10年の輸出量は620万t程度となり前年の940万tを320万t(34%)下回ると推計される。

鉄スクラップ輸出月次推移



データ: 日本鉄源協会



データ: 日本鉄源協会

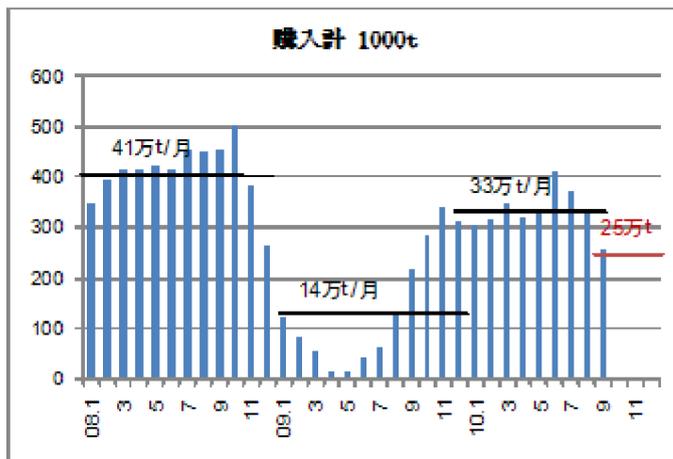
(2) 輸出低減の理由

1) 鉄スクラップ国内需要の回復

発生低迷持続の一方、国内需要は回復しつつある。しかし10年下期に入り様子が少し変わってきた。高炉メーカーと電炉メーカーに分けて展望する。

高炉メーカー；自動車生産減産により、生産計画を下方に修正している。先ごろ発表された9月の新車販売台数が低位となったことを踏まえてカーメーカーが生産をさらに見直せば、鉄鋼生産もさらに減産の方向が免れない。一方、10-12月期の原料炭価格は-7%、鉄鉱石は-13%となり、円高効果もあってトータルのコストは-15%程度に繋がるとの試算がある。以上の2つの理由により高炉メーカーの市中スクラップ購入量は一服すると予想する。今後10-12月は月25万t程度と推定すると、10年トータルでは345万tと見込まれる。前年に比べて175万t増であり、この分は過去の経験則からみて輸出下押し要因に繋がる。

高炉メーカー市中くず購入月次推移



データ: 業界紙調査

高炉購入と輸出

	輸出	高炉購入
2006	765	264
7	645	355
8	544	492
9	941	170
10見	620	345

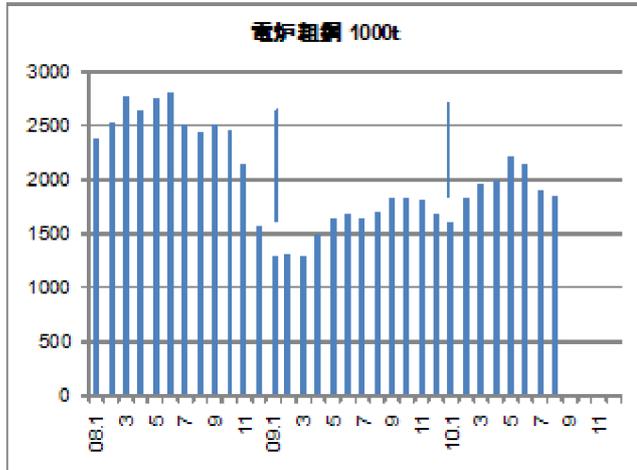
増減

	輸出	高炉購入
2006		
7	-120	91
8	-101	137
9	397	-322
10見	-321	175

備考: 高炉購入は業界紙調査

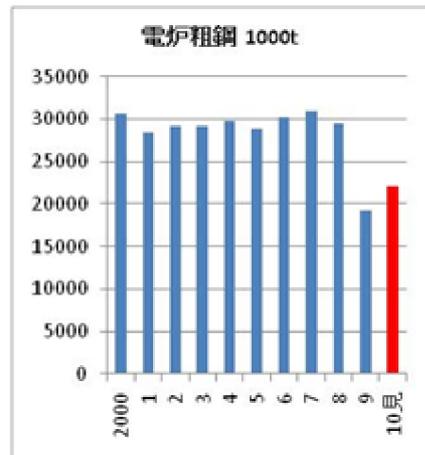
電炉メーカー；10年1-8月の電炉粗鋼生産量（速報）は1,547万tとなり、低位だった前年同期を28.4%（約340万t）上回った。内需は回復しないもののビレット輸出を促進していることが寄与したと見られる。このペースで10年1-12月を計算すると2,300万tとなるが、9月以降の円高と伸び悩み続く国内需要から2,200万t（前年の1,920万tに対して14.6%、280万t増）程度と予測する。従って電炉メーカーの鉄スクラップ消費は単純にみて280万t増加することになる（リターン屑の発生量が変われば変動する）。

電炉粗鋼生産月次推移



データ: 日本鉄鋼連盟

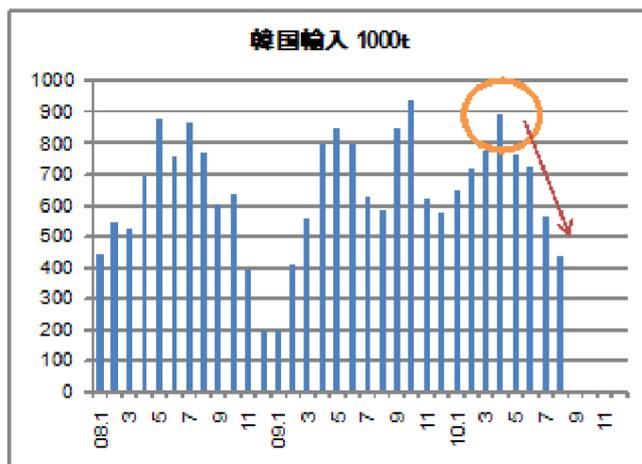
年次(暦年)推移



2) 海外マーケットの変化

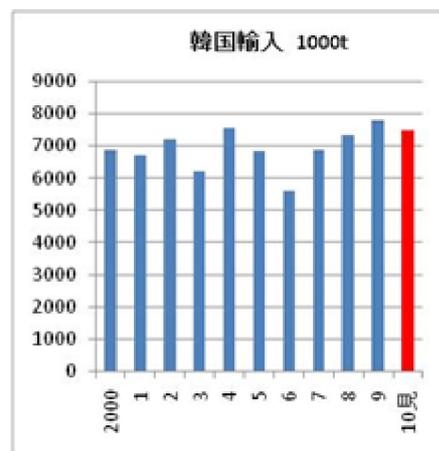
韓国；韓国も建築内需が低迷し、普通鋼電炉は下期減産の状況と聞く。このため、年初940万t（前年比160万t増）の鉄スクラップ輸入が必要とした見通しは下方となると想定する。10年1-8月は553万t、前年比14.7%増で推移しているが、月次推移をみると4月の月間89万tをピークに低減し8月は44万tとなり、ピーク比半減している。今後9-12月を45万t/月で推移するとすれば、年間730万t程度となる。低需要が背景にあるが、価格が折り合えば前年を若干下回る程度の規模となると読む。

韓国の鉄スクラップ輸入月次推移



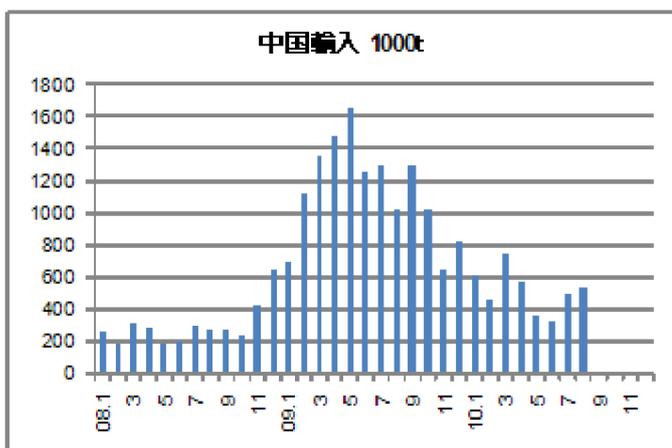
データ: 韓国通関統計

年次(暦年)推移



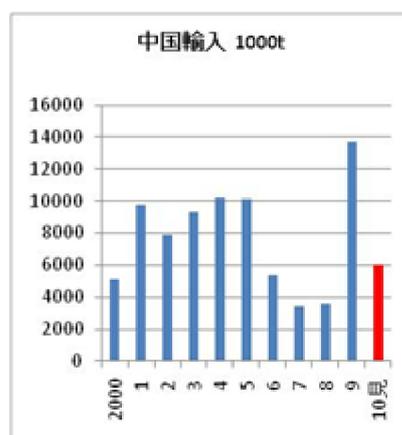
中国；10年1-8月の鉄スクラップ輸入量は409万tであり、前年同期の989万tに比べ41.4%の水準である。月次の動きをみると3月に74万tを回復したが、以降は伸び悩み8月は53万tとなっている。過去最高を記録した前年の1,369万t時の月間114万tと比べ半減以下のスピードである。10月上旬は国慶節で商いがストップすることもあり年末にかけてもりあがる要素は少ない。このペースのまま推移するとすれば、10年は600万t程度に留まると推察する。一方、現在東京でおこなわれている世界鉄鋼協会の年次総会では、引き続き中国が世界を牽引し10年は前年比6.7%増の6億2,000万t程度となると見通している。鉄鋼増産が止まないなかでの鉄スクラップ輸入半減は、ちぐはぐな動きだが過去にもこのような動きがあり、要するに鉄鋼生産原料として輸入スクラップが位置づけられていないということであろう。韓国とは異なる市場として認識すべきである。

中国の鉄スクラップ輸入月次推移



データ;中国通関統計

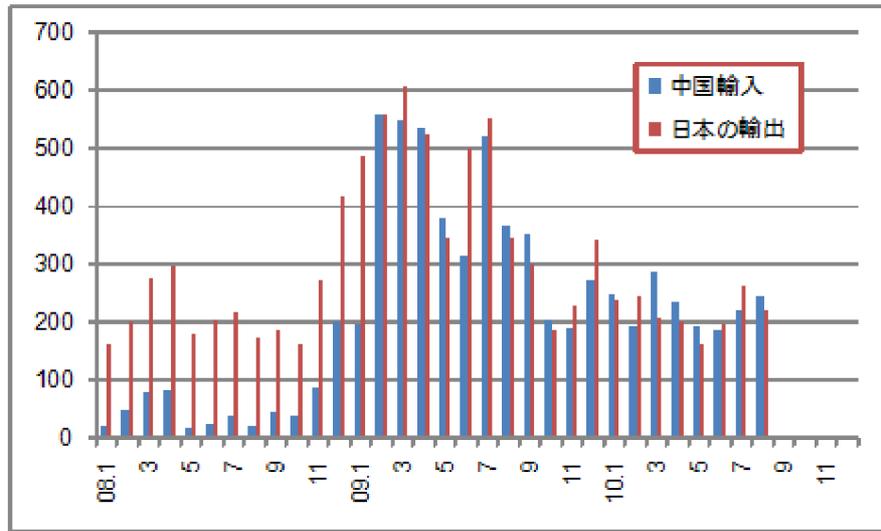
年次推移



「雑品」の問題；配電盤、湯沸かし器、廃モーター、廃家電・OA機器等の銅付き未解体鉄スクラップが、輸出通関時に鉄スクラップのうちその他の鉄スクラップの品名コードで輸出されている。しかし中国では銅資源として輸入通関している節があり、日本の輸出通関量と中国の輸入通関量に差異があった。しかし08年時点の差異約200万t(この分が「雑品」輸出量と解釈していた)は09年2月より、中国側の輸入通関に劇的な変化が表れた。ほとんど同一となったのである。輸入通関上の税率が改定され、「雑品」は通関後独自のカテゴリにより把握されていると聞くがデータは公表されていない。

「雑品」輸出の動向が把握できない状態にあるが、なくならない貨物船や岸壁ヤードの火災事故及び中国の人件費高騰によりビジネスの魅力はひとところに比べて低下してきており、量的には08年の半減前後で推移していると思われる。いずれにしてもデータ上、中国向け鉄スクラップ輸出に「雑品」が含まれていることを考慮する必要がある。

日本の中国向け鉄スクラップ輸出と中国の日本からの輸入



データ;両国通関統計

以 上